

ガリラヤのほとり ネット版 vol.2

『ガリラヤのほとり ネット版 vol.2』では、昨年 11 月 24 日に横浜聖アンデレ教会で行われました、リグリマ・ジャパン報告会について配信いたします。「リグリマ」とは、バングラデシュに住む少数民族ガロの女性たち(リグリマ・バングラデシュ)と、日本の女性たち(リグリマ・ジャパン)によって設立されたグループであり、「団結、結束、共働」を意味するガロ語です。その名の意味する通り、ガロと日本の女性たちが共に働くことを通じて、バングラデシュにおける女性の地位向上と経済的自立、差別の撤廃、尊厳の回復、弱者が安心して暮らせる社会の実現を考えている団体です。リグリマ・ジャパン代表の上澤伸子さんは、この報告会の 1 か月前、約 1 ヶ月間に渡りガロを視察されており、現地の詳細な現状をご報告してくださいました。日頃、皆さまにお献げ先をご紹介させていただく機会は多くありませんので、今回の報告会は、お献げ先を知っていただける貴重な機会となりました。当日は、22 名の方々が報告会にご参加くださり、この場をお借りして感謝申し上げます。また、いらっしゃれなかった皆さまにも、この『ガリラヤのほとり ネット版 vol.2』を通して、リグリマ・ジャパンの活動について知っていただけたらと思います。なお、10 月末に冊子として皆さまにお届けさせていただきました感謝箱献金事務局ニュースレター「ガリラヤのほとり」は今後も定期的に送らせていただきます。『ネット版』は HP 内での発信となります。各教会お一人お一人さまに、ご覧いただければ幸いです。

感謝箱献金事務局（コア）

リグリマ・ジャパン報告会

「ガロの女性たちと支え合ってーリグリマ・ジャパンの活動ー」

(以下：報告会資料より)

■バングラデシュのガロ

- ・バングラデシュの 27 の少数民族の一つ
- ・北東部と中北部に住むモンゴロイド系民族
- ・わずか 10 万人。全人口の 0.07%
- ・言語はベンガル語、ガロ語
- ・宗教はガロの 95 パーセント以上がキリスト教
(カトリック 67%、バプテスト 29%)、
5%がアニミズム(聖霊信仰)
- ・母系制



- ・民族的にも宗教的にもマイノリティであるために、**リグリマ・ジャパン代表 上澤伸子氏**
就学・就労の機会不均等、権利の喪失、日常的な蔑視など、不平等な扱いを受けてきた。

■北部国境地帯の歴史とガロ

- ①英領時代から続く部族のネガティブなイメージ。
 - ・丘陵や森の住民、狩猟民族、燃畑農法、土着の文化⇒無知、野蛮、後進部族⇒文明化の必要あり
- ②政治混乱期の悲惨な体験
 - ・1947年インド・パキスタン分離独立⇒インド・ガロとバングラデシュ・ガロの分離
 - ・1964、66年のムスリム・ヒンドゥー暴動、71年の独立戦争⇒インドへ避難。(帰国したガロは僅か)
- ③国家による少数民族の不可視化
 - ・1972年 新憲法制定時に少数民族の記述削除
 - ・1988年 イスラム教を国教に⇒独自の文化を失い、日常的に「能なし」「インドへ帰れ」と罵倒

■ガロを取り巻く環境

- ①政治的・社会的環境
 - ・行政によるマイノリティ政策の欠如
 - ・インフラ整備の遅れ(電気、水道、ガス、交通網)
- ②自然環境
 - ・毎年雨季には田畑の冠水、乾期には日照り
 - ・毎年の土砂崩れ、鉄砲水、竜巻による被害
 - ・10年に一度の河川増水による大洪水
⇒人的被害、農作物被害、家屋への浸水、橋・道路などの崩壊、伝染病の蔓延、貧困のサイクル

■分かち合いを求めるガロの女性たち

- ・北部国境地帯の日雇い農業労働者 1日の賃金 100～150 円
- ・大雨や日照りなどの農業被害で失職
- ・高利貸しから金利 20%

↓

リグリマ・バングラデシュに参加

- ・聖書講読、祈り、問題の共有による連帯創出
- ・貯蓄と低利ローンによる収入創出(灌漑用水、苗の購入、子どもの教育、病気の治療のため)

↓

マイノリティの日々の生きにくさを乗り越える。

横浜聖アンデレ教会会館での報告会の様子



■リグリマ・バングラデシュの活動

- ・リグリマ・バングラデシュ実行委員会（ディレクター、事務局長、会計、各グループリーダー）
- ・12 グループ、メンバー約 112 名
- ・定期的にミーティング（祈り、聖書講読、問題の分かち合い、貯蓄とローンの返済）
- ・貯蓄に毎月 5 タカ、教育基金に 5 タカ
- ・貸付
→中央委員会からグループで約 1 万タカを借入し、各自に分配する。メンバー全員が返済することができたら個人への貸付を行う。この資金を手元に小動物、灌漑用水、ミシンなどを購入し、収入を増やす。

■リグリマ・ジャパンの活動

- ・リグリマ・ジャパン運営委員会(中心メンバー10 名)
- ・資金援助のために、会員の募集、手工芸品販売。
- ・ガロの女性たちの現状や文化を日本に伝える。
- ・モットー「素早く大きな進歩より、地道で確実な一歩を」
→双方の生活ペースに合った支援や相互協力を模索
- ・今後の予定
 - ①現地運営費(有給スタッフの給与補助)に、手工芸品販売、会費や寄付金の募集。
 - ②日本聖公会婦人会の支援により、日本人指導員による裁縫トレーニングを実施、改良かまどを導入する。
 - ③フレンドシップレターによる顔の見える交流を目指す。
 - ④災害などの緊急時の基金集め。

■おわりに 生活の変化

○目に見える変化

- ・グループ数が 4 から 12 に増加
- ・リグリマ・ショップ開店
- ・娘世代の入会

○目に見えない変化

- ・自分たちでグループを立ち上げ運営しそれを維持させる。
⇒そのプロセス自体が両方のメンバーにとっての変化と言える。
- ・日本のメンバーは、子育て、介護に負われる日々の中で、自分の頭で考え、行動する時間を持つことができる。

○共感しながら共に働く

- ・日本とバングラデシュのグループ同士の交流
⇒フレンドシップレターや小規模事業への投資を通じて。

○報告会終了後、上澤さんにお持ちいただいた手工芸品のミニバザーが開かれました。
とても鮮やかな色彩と手の込んだ刺繍が施された雑貨に皆さまにもバザーを楽しんで
いただいている様子でした！



バザーの様子



日本聖公会聖歌集カバー

□報告会を終えて

バングラデシュ・ガロの女性たちは、少数民族であること、女性であるがゆえに様々な差別にさらされ、生きにくく苦しんでおられることには変わりありませんが、リグリマ・ジャパンの「裁縫トレーニング」や「改良かまどプロジェクト」の働きによって、ガロの女性たちの生活に良い兆しが見られているように見受けられました。特に新しく始められる「改良かまどプロジェクト」では、従来のかまどに対し、①薪の使用量が半分で済むため費用が抑えられ、木の伐採も減らせる。②煙が出ないため目や肺への健康被害が防げる。③調理時間が減らせるため、時間を有効に使える。といった利点があります。今回の報告会でリグリマ・ジャパンの働きが、ガロの女性たちの日々の生活に根付いた支援であること、そして日本聖公会の皆さまからお献げいただいた尊い感謝箱献金が、このような形で用いられていることをご報告いただきました。